

二〇一六年度春季企画展

「早稲田の通信講義録とその時代 1886—1956」

廣木 尚

二〇一六年度春季企画展では「早稲田の通信講義録とその時代 1886—1956」と題し、早稲田大学が創立当初から七〇年にわたり精力的に取り組んだ校外教育事業と、そこに集った校外生たちの諸相にスポットをあてた。

会期は二〇一六年三月二日から四月二三日までの一か月間、会場は會津八一記念博物館一階企画展示室（早稲田キャンパス）であった。期間全体で二、八六四人の来館者があった他、『読売新聞』（二〇一六年三月三〇日付）、『朝日新聞』（同四月五日付）に紹介記事が掲載され、『日本経済新聞』（同四月五日付）の「春秋」欄でも取り上げられるなどの反響を得た。

本展示会開催に当たり、ご協力をいただいた埼玉県富士見市立図書館をはじめ、関係各位・各機関にあらためて深謝申し上げます。

以下、主な展示資料を紹介しつつ、企画展の内容を説明したい。なお、所蔵先が記されていない資料は、早稲田大学学術資料センター所蔵の資料である。



今から130年前、創立もない東京専門学校がはじめた講義録による通信教育事業。
 中学校や女学校への進学さえ簡単ではなかった時代、全国津々浦々、植民地にも送り届け
 られた早稲田の講義録は、学校に通うことのできない多くの人々に学びの機会を提供した。
 そこではどのような教育が営まれ、人々はそこに何を求めたのか――。
 70年間、実に200万人以上が学んだ通信講義録に焦点を当て、かつてキャンパスの外
 に広がっていた「無形の学校」の実相に迫る。

< 講義録の製作と発送の様子 >



2016年度 早稲田大学 大学史資料センター 春季企画展

早稲田の通信講義録とその時代

1886-1956

2016 3/22(火) - 4/23(土)

早稲田大学 早稲田キャンパス2号館 會津八一記念博物館1階 企画展示室

日時=2016年3月22日(火)~4月23日(土)

時間=10時~17時 ※入館は30分前まで

休館=日曜日 ※4月3日(日)は開館

入場=無料

会場=早稲田大学 早稲田キャンパス2号館
 會津八一記念博物館1階 企画展示室

主催=早稲田大学 大学史資料センター

042-451-1343

<http://www.waseda.jp/culture/archives>



はじめに

今からちょうど一三〇年前、創立もない東京専門学校（早稲田大学の前身）が刊行をはじめた通信講義録は、一九五六（昭和三二）年に募集を停止するまで、実に二〇〇万人を超える人々に購読された。

一九世紀の終わり、近代的な教育制度が整備され、日本にも学歴がものをいう時代が訪れる。しかし、その時代は経済的に恵まれないほとんどの人々にとって、幼少にして夢を絶たれる理不尽な時代でもあった。上京や進学がかなわないそのような人々にとつて、勉強を続ける数少ない選択肢が通信講義録の購読だった。早稲田大学では通信講義録の購読者は「校外生」と呼ばれ、規則に明記されたれっきとした学校の一員だった。

居ながらにして最新の学問に触れることができる講義録は、早稲田大学にとつては自校の教育をキャンパスの外に行き渡らせる格好の媒体であり、講義録だけを頼りに独学に励む校外生たちは、「在野の精神」を在校生以上に体現した存在だったといっても過言ではない。

本展示会では、早稲田の特色をもっとよく表したといべき通信講義録の〈世界〉に、学校側の取り組みと学側の意識の両面から迫る。もちろん、取り上げることができたのは七〇年に及ぶ通信講義録の歴史のほんの一端にすぎない。しかし、今回紹介するわずかな史料の中にも、「学び」に賭けた人々の思い、日々の苦悩や明日への希望、そして、彼らが格闘した時代の肌触りを感じることができらるだろう。本展示会が、学生のみならずはもちろん、普段、教育の場に接することのない多くの方々にとつても、「学び」の意味を問いなおす機会となれば幸いである。

1. 教ゆるにも亦た術多かり——通信講義録のはじまり

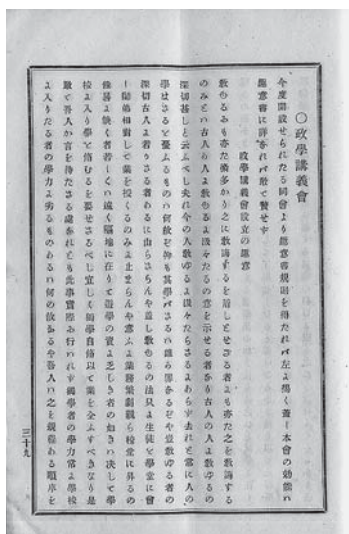
一八八〇年代の中ごろ、憲法発布と国会開設を数年後にひかえ、日本の国家と社会は急速に形を変えていった。西歐に範をとった法律や制度が続々と導入されていく一方、新しい知識を伝達するための教育制度や言論メディアはいまだ整っておらず、そのすきまを埋め合わせるべく、東京の私立専門学校を主な担い手として、講義録の発行が盛んに行われた。

東京専門学校が講義録による通信教育事業に乗りだしたのは、開校から四年後の一八八六（明治一九）年のことである。高田早苗の示唆のもと、はじめ学外の個人への委託事業としてはじまった早稲田の通信講義録は、その後、事業主体を大学の出版部へと移し、いくたびかの経営危機にみまわれながらも、長らく継続されていくこととなった。他の講義録の多くが短命に終わる中、ユニバーシティ・エクステンション（大学開放）という明確な理念に支えられた通信講義録が、早稲田の教育をキャンパスの外、全国津々浦々に行き渡らせていった。

【主な展示資料】

山田喜之助講義『英米代理法』（一八八六年六月）

いち早く通信講義録事業に乗り出した英吉利法律学校（後の中央大学）の講義録をまとめたもの。同校は、校則に校外生制度を明記するなど、東京専門学校の制度にも影響を与えた。著者である山田喜之助（一八五九―一九一三）は、



「政学講義會設立の趣意」
(1886年4月)



山田喜之助講義『英米代理法』
(1886年6月)

小野梓を中心とする鷗渡会の一員として東京専門学校に設立に尽力した人物。一八八五（明治一八）年の法律科移転問題に關係して辞職した後、英吉利法律学校の設立发起人に名を連ねた。

通信講学会の講義録／早稲田大学図書館所蔵

通信講学会は、一八八五（明治一八）年二月、雑誌『教育時論』の発行元として知られる開発社内に設立された。同会の活動は短命に終わったが、執筆者に高田早苗や後に早稲田大学学長をつとめる平沼淑郎（一八六四～一九三八）らを擁し、東京専門学校が通信講義録事業に乗りだす一つのきっかけとなった。

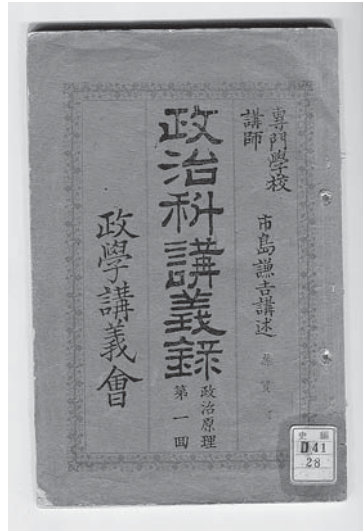
「政学講義會設立の趣意」（一八八六年四月）

『中央學術雜誌』二七号に掲載。政学講義會は、高田早苗の構想に感化された横田敬太という人物が講義録発行のために設立した団体。一八九一（明治二四）年に学校直営となるまで、講義録の発行は彼に委ねられていた。「教ゆるにも亦た術多かり」との文言からはじまる趣意書から、通信講義録にかけの高田や横田の意気込み



高田早苗（一八六〇～一九三八）

鷗渡会の会員として東京専門学校の開校に関わって以来、終生を早稲田大学の発展に尽くした高田早苗は、通信講義録事業の発案者でもあった。通信講学会の講義録を執筆した経験から、東京専門学校の講義内容を筆記して出版することを思いついた高田は、はじめは彼の構想に共鳴した横田敬太に経営を委託し、横田が経営を退いた後は、自ら主導して通信講義録事業に携わった。日露戦争後の経営難の際には、学内の廃止論を制し、全ての損害を背負う危険を冒して出版部の経営を引き受けるなど、講義録事業の存続に精力を傾けた。



政学講義会の講義録
(1886年5月)

が伝わってくる。

政学講義会の講義録（一八八六年五月）

著者の市島謙吉（一八六〇～一九四四）は鷗渡会の一員として東京専門学校の設立に関わり、以後、会計監督・図書館長・理事・維持員などを歴任した。

ユニバーシティ・エクステンション



早稲田の通信講義録がはじまった一九世紀の後半、欧米諸国でもユニバーシティ・エクステンション（大学開放・大学拡張）と呼ばれる高等教育普及運動が興隆していた。この運動が特に盛んだったイギリスとアメリカでは、女性や労働者階級など、それまで高等教育を学ぶ機会に恵まれていなかった人々に向けて、学外での巡回講義や講義録による通信教育が実施されていた。

一八九二（明治二五）年、アメリカ留学帰りの講師・家永豊吉（写真）によってこの動向が早稲田に紹介されると『英米に於ける教育上の一大現象』『同攻会雑誌』第十・一一号）、翌年にはじまった巡回講話とともに、通信講義録事業もユニバーシティ・エクステンションの一環に位置づけられることになった。一九一〇年には巡回講話と通信講義録を兼務する校外教育部が新設され、二つの事業の緊密化がはかられた。

2. 無形の学校——通信講義録の展開

現在の制度と異なり、通信講義録を修了しても公的な資格が得られるわけではなかった。しかし、早稲田の講義録の講習者には、聴講や図書館の利用など「校外生」としての権利が与えられ、試験に合格すれば正規の課程に編入することもできた。講義録の執筆は主として正規の教員が担い、その中には学問的に高い評価を得たものも少なくない。

向学熱の高まりを背景に、次第に種類を増やした早稲田の通信講義録は、二〇世紀の初頭には小学校以外の全ての課程を網羅し、「無形の学校」（高田早苗）と称されるまでになる。

質問・相談への対応、各地での校外生の会の開催、副読本の刊行、各種グッズの通信販売など、校外生生活を充実させる仕組みも整えられた。講義録の修了者は「准校友」とされ、早稲田大学に深い愛着をもった彼らは、大学にとつて欠くことのできない支持基盤ともなった。幾十万の校外生を獲得した通信講義録が、早稲田の名を全国区に押し上げたといっても過言ではない。

【主な展示資料】

東京専門学校 校外生規則（一八八八年六月）

一八八七（明治二〇）年九月に定められた校外生規則は、一八八八年六月には東京専門学校規則の中に組み込まれた。同時に、正規生への編入制度も設けられ、早稲田の一員としての校外生の待遇が明確化された。

『東京専門学校講義録改正要領・学課表』（一八九五年九月）

早稲田大学出版部



早稲田大学出版部の淵源は、一八八七（明治二〇）年、横田啓太の政学講義会が東京専門学校出版局を名乗ったことにはじまる。横田が経営から退き、学校直営になると東京専門学校出版部となり、次いで一九〇二年、早稲田大学出版部に改称された。

当初、教務課事務室の片隅に置かれた出版部は、通信講義録事業の好調を受けて、一九〇一（明治三四）年には二〇坪ほどの家屋を新築。一九〇六年に木造二階建一〇〇余坪の事務所に移り、一九二七（昭和二年）には鉄筋コンクリート三階建の事務所を建造した。講義録以外にも、『早稲田叢書』『大日本時代史』、雑誌『外交時報』など重要文献の発刊を手掛け、出版史・学問史に名を残す存在となった。

岡山県久世村役場宛小川為次郎、鳩山和夫書簡（一八九四年九月）

東京専門学校幹事と校長の名で講義録の規則書と特別紹介券の配布を依頼したもの。紹介券を添えて申し込めば入学金は免除するとある。



出版部講義録関係者（1930年頃）

前のテーブル、右から二人目に市島謙吉主幹、三人目が高田早苗部長。後列、一番左に青柳篤恒編集長。



校外生出身卒業生記念写真（1920年2月24日）

大隈重信邸で撮影。中央に大隈の姿も見える。

大西祝^{はじめ}（一八六四〜一九〇〇）



キリスト教的自由主義の立場から同時代の国家主義的風潮に敢然と立ち向かった哲学者・大西祝は、東京大学（後の帝国大学）、同大学院で学んだ後、一八九一年から一八九八年まで東京専門学校で教鞭をとり、哲学・倫理学・心理学などを講じた。

大西が東京専門学校講義録に執筆した『西洋哲学史』は、三六歳の若さでこの世を去り、著作の多くを未完のまま遺すことになった大西の代表作である。日本人による最初の本格的な哲学史とされる。

原稿料支払通知（一九〇〇年五月）／早稲田大学図書館所蔵

大西祝宛の講義録原稿料の支払通知。原稿用紙一枚あたり一〇銭から二〇銭が支払われている。

大西祝「西洋哲学史草稿」（一八九五年）／早稲田大学図書館所蔵

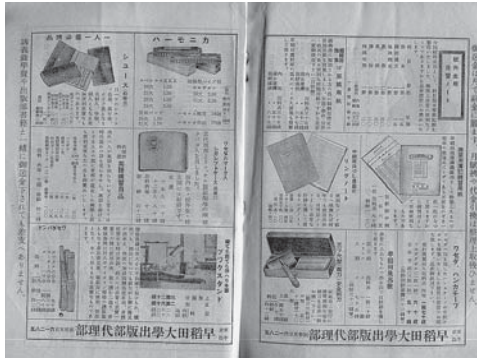
大西祝『東京専門学校講義録 西洋哲学史』／早稲田大学図書館所蔵

残された草稿と講義録の断簡から大西の推敲の跡をたどることができる。

校外生生活を支えた品々

小包用帳票

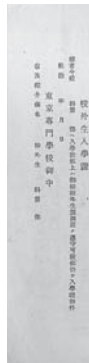
講義録の送付に使用された。



ワセダグッズ広告（1937年）



早稲田風呂敷



校外生入学証（東京専門学校時代）

早稲田風呂敷

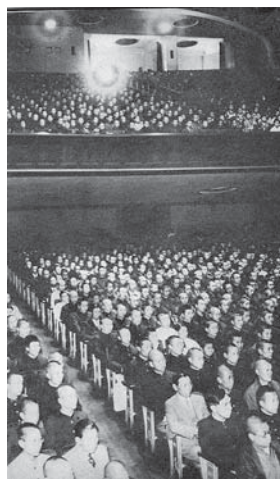
一九三七年の広告によると、送料込で富士絹製が一元二〇銭、メリンス製が一元、人絹（レーヨン）製が七五銭だった。送付先が朝鮮の場合は三二銭増しとある。

学費免除之証（一九三五年五月二〇日）

奨学懸賞答案の正解者に対する学費一部免除の通知。

時代を彩った講義録・副読本

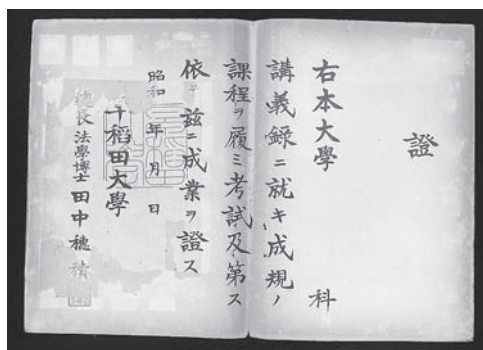
多彩な講義録とともに、中等教育課程の校外生に対しては、『新天地』『女学の友』『早稲田商業青年』といった副読本も発行された。副読本には講師の訓話や時事解説、マンガのほか、文芸作品や投書、校外生出身者の経験談などが掲載された。残存数が少なく、発行期間など不明な部分が多いが、校外生の様相を今に伝える貴重な史料である。



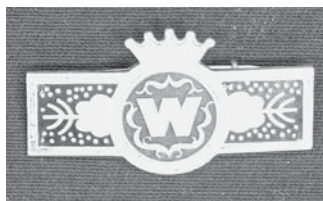
大隈講堂で開催された
関東校外生大会の様子（1940年）



校外生大会記念メダル（1937年）



講義録成業証
（田中穂積総長時代（1931～1944年））



校外生大会記念ピンバッジ（1939年）



『新天地』



『早稻田中学講義』



『女子の友』



『早稻田高等女学講義』

3. 仰ぐは同じき理想の光——多様な校外生と独学の実像

日露戦争が終結した一九〇五年、小学校就学率は九五%を越え、日本に本格的な学歴社会が到来した。しかし、小学校を卒業しても、中学校など上級学校に進学できる者は全体の一割にも満たなかった。貧困や家庭的・身体的事情などで上京や進学がかなわない多くの人々にとって、通信講義録による独学は勉強を続ける数少ない手段だった。

通信講義録を購読する目的は、多くの場合、「専検」（専門学校入学者検定試験）など各種の検定試験・資格試験に合格して立身出世を果たすためだった。校外生からは後に早稲田大学の教員となるなど、各界で活躍する人物も現れた。しかし、講義録の修了者は十人に一人ともいわれたように、独学によって成功をつかむには、人一倍の忍耐と努力が必要だった。日々の仕事や生活に忙殺され、そのほとんどが中途で脱落していった。しかし、それでも校外生たちは、講義録の中につかのまの自由を感じ、それぞれの将来を夢みただのである。

一方、日清・日露戦争を経て、日本が東アジア一帯を勢力範囲に収めていくにしたがい、校外生も朝鮮・台湾などの植民地や、隣国の中国へと広がった。立身の術がほとんど閉ざされていた植民地の少なからぬ人々が、日本語で書かれた講義録の講習に活路を求めた。国際情勢の変容にも影響されて、早稲田の通信講義録は幅広く、多様な人々の許に送り届けられていった。

校外生出身の早大教員

塩沢昌貞（一八七〇～一九四五）

茨城県出身。一八九一年、東京専門学校英語政治科卒。一九〇二年早大講師、一九〇七年教授。長年にわたり経済学を講じるとともに、一九二二年から学長、一九二三年に短期間、総長を務めた。「大隈重信の知恵袋」として知られた。

津田左右吉（一八七三～一九六一）

岐阜県出身。一八九一年、東京専門学校邦語政治科卒。満鮮歴史地理調査室研究員等を経て一九一八年、早大講師。一九二二年教授。『古事記』『日本書紀』の文献学的研究や東洋思想史研究で新生面を切り開いたが一九四〇年、著書が出版法違反に問われたことにより（津田事件）、早大を辞した。一九四九年、文化勲章受章。



塩沢昌貞（1870～1945）



津田左右吉（1873～1961）

田中穂積（一八七六～一九四四）

長野県出身。専門は財政学。一八九六年、東京専門学校邦語政治科卒。東京日日新聞社を経て一九〇四年、早大講師。一九一一年教授。一九三二年から一九四四年に逝去するまで総長を務め、キャンパスの整備など戦時下の学内行

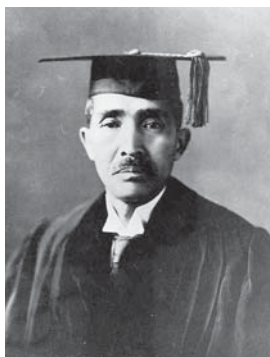
政に尽力した。

高橋清吾（一八九一～一九三九）

宮城県出身。一九一三年、早稲田大学専門部政治経済学科卒。米国留学を経て一九一九年早大教授。実証的な政治学の研究で知られた。

吉村正（一九〇〇～一九八四）

福井県出身。一九二四年、早稲田大学政治経済学部政治学科卒。一九三二年早大講師、一九三八年教授。政治学者として多数の著作を執筆するとともに、各種の政府委員を歴任した。



田中穂積（1876～1944）



高橋清吾（1891～1939）



吉村正（1900～1984）

校外生の実相

渋谷定輔（一九〇五～一九八九）



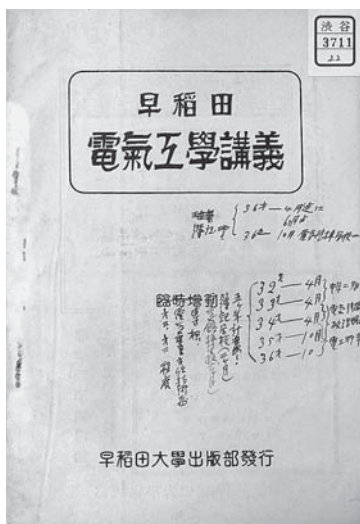
埼玉県南畑村（現・富士見市）に生まれる。一〇代の頃から農民運動に身を投じ、小作争議や農民自治会、農民組合活動に奔走した。そのかたわら詩作にも才を発揮し、一九二六（大正一五）年には詩集『野良に叫ぶ』を発刊した。戦後は日本農民文学会結成に参画。自身の日記をもとにした生活記録『農民哀史』（一九七〇年）も名高い。一九八二（昭和五七）年から思想の科学研究会会長をつとめた。

埼玉県富士見市立図書館に寄贈された渋谷の蔵書には一九三五年から四二年までの早稲田の講義録が収められており、三〇才代をむかえた渋谷の学び直しの姿勢をうかがうことができる。

【主な展示資料】

「五か年計画」／富士見市立図書館所蔵

渋谷定輔旧蔵『早稲田電気工学講義』臨時増刊号（一九三五年三月）の表紙に書かれたメモ。専検に合格し、資格取得するまでの学習計画が記されている。実際のところ、渋谷は一九三七年、三二才の時に治安維持法違反で逮捕されており（埼玉人民戦線事件）、この計画が実を結ぶことはなかった。



「五か年計画」／
富士見市立図書館所蔵

渋谷定輔旧蔵『早稲田商業講義』（一九四二年四月）／富士見市立図書館所蔵

一九三九年に出獄した後、渋谷は講義録の購読を再開している。

馬橋日記〔抜粋〕

埼玉県松山町（現在の東松山市）在住の馬橋岩蔵（当時一七歳）が、関東大震災が発生した一九二三（大正一二）年に記した日記。岩蔵は町役場で働きながら夜学に通い、『早稲田中学講義』も購読する知識欲の旺盛な青年だった。日記には、届いた講義録を綴り直したり虫干したりと、いとおしむように扱う様子が描かれている。この日記は『馬橋日記 大正期の青年日記』のタイトルで東松山市から刊行されている。

三月七日 小春日和 四十四度

今朝はいつもの通り起床した。役場へ出勤した。朝は五目ばんを永瀬さんが持って行ってしまったので残念ながら出来なかった。随時月税税外収入の各手数料の整理もやった。今日は日記を書くのに横にして書いた。丁度役場へ此言ふ手紙が来たので書いて見ると面白い様である。お昼は家へ用達に来たのだ。今日は中学校義録〔講義〕にかなのめばえが来てゐた。

役場では又一生懸命にやった。側量用の鳥口を持って行って書いて見た。中々よく出来る。赤十字の内から五十銭引ぬいてばんを買った。沢山喰った。家へ帰りたい然共、松林先生と鉄道工事を見に行つた。其の実に大なるに驚ろいた。家へ来たのは五時、ヒルムを十銭買った。野口のハちゃんから。夜学に行つた。珠算の面白いのをおそわつた。新らしくて面白くてうれしかった。(後略)

三月二十日 曇晴昼後ヨリ北風 五十度

今朝……七時前に起き出した。雀が鳴き出した。曇つた様な天気。朝からひどくくびがいたむ。

昼……役場では田租所得税全上県税附加税の各切簿を割印し、之を各区長に送るため一心不乱にやる。今朝は大黒屋へ行きくびへ貼る薬買ひぬ。少し向ふで貼ってくれぬ。絆ソーコー。脱脂綿等外指薬にて三十銭取らる。外ゴムの指袋代六銭。

吉田さんの竹山にて竹の枝を取り上沼に入れて、エビ取りをする。面白くなく昼よりは全く全力である。其して明日くばるばかりにして家へ来る。藪田春同君より切手交換にて送付あり。三枚取つて十八枚代りに送る。送費二銭、又中購第三十六号来り。学費切の報あり。金がつまつてつらい。

夜……北風が出た。寒い／＼北風が夜学も今夜かぎりて終りをつげた。第一時間目は遊び、第二時から校長先生の明夜一晚来る様にと言渡しがあっただけで家へ帰って来た。夜寝たるは十一時。(後略)

十月二十日 晴次第に曇ル 七十度

相変らず寢坊ではホト／＼あきれてしまった。もう駄目だ。実に駄目である。

役場へ出勤すると間もなく始めた。

昼からは月税をやった。郡役所へも使にやられて一時間ばかり遊んで来た。三時終ひの土曜日でも最後に騰写版を頼まれて実に／＼へい／＼としてしまった。三時半頃迄やって家へ帰って来た。「あなうれし」待ちに待った大日本切手類鑑外数点書留で着した。実に全くうれしかった。

其の外最後の講義録第四十八号が来た。夜に入る迄表紙の綴り込みをやつてみた。実に何んとも言へぬうれしさが込み上げた。八百国、銅一其れに本郷春治君が来て五目を一生懸命に打つて十時迄も遊んだ。

※最後の講義録第四十八号来る。大日本切手類鑑来る。講義録(早稲田)第四十八号本日にて終了。

月日	金銭	項目
3月1日	15銭	ハガキ十枚代
2日	30銭	羽織のヒモ一本代
	10銭	同 かん代
3日	50銭	三月号大正写真通信代小為替
	3銭	小為替手数料
	15銭	封筒三状代
5日	8銭	なんばん一杯
	6銭	活動用ヒルム六つ代
7日	10銭	活動用写真用ヒルム代
8日	10銭	代書料
10日	1円	ヒルム英製2本
	80銭	ヒルム独製2本
	1円10銭	ハーモニカー一箇代
	1円	永瀬さんヨリ入る
11日	10銭	お茶菓子代
13日	12銭	セルロイド製活動写真用フィルム台紙(バサミ)十五枚
16日	60銭	春蒔種子・組物・二組代
	3銭	小為替料右代金
	3銭	同郵送料
	5銭	小遣
17日	10銭	小遣
18日	15銭	小遣(蜜柑、ヒルム活用)
	8銭	葱なん(藤田)
	5銭	ランプの油代
	10銭	油紙一枚代
20日	30銭	出来物薬代
	6銭	ゴム指袋二ヶ代
	2銭	通信代
21日	5円76銭	早稲田中学講義之最後払入
	10銭	ミルクキャラメル一箇代
22日	15銭	小遣(大抵はフィルム)
	12銭	水仙二球代
23日	3銭	三銭の九字
25日	88銭	兎を売る
26日	35銭	写真用(活動写真)フィルム一束(45枚)代金
27日	36銭	町長、永瀬さんヨリ種子代金
	15銭	ヒルム(活動写真用)代
28日	6銭	ヒルム狭み二個代
	37銭	中村君へ(写真薬品代金)
30日	2銭	ヒルム(二枚代)

※左表は馬橋岩蔵の一九二三年三月の小遣い記録。講義録の経済的負担が軽いものではなかったことがわかる。

障害者教育への活用

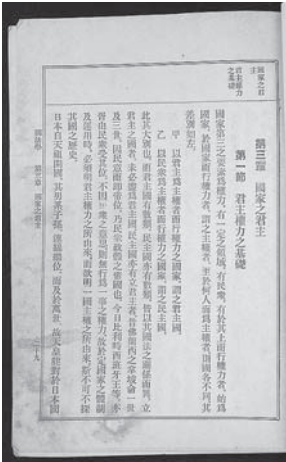
『点字中学講義録』（一九〇六年）／早稲田大学図書館所蔵

創刊当初の『早稲田中学講義』の点字訳。神戸訓盲院（現・兵庫県立視覚特別支援学校）院長・左近允孝之進（二八七〇～一九〇九）の計画によるとされる。左近允は東京専門学校を卒業した後、自身も失明し、神戸訓盲院を設立した人物。講義録の幅広い受容を示す貴重な史料である。

海外・植民地への広がり

漢訳『早稲田大学政法理財科講義』（一九〇七年二月）

一九〇五（明治三八）年、早稲田大学は清国留学生部を創設し、中国人留学生の積極的な受け入れを開始した。それにともない、翌一九〇六年、漢訳版講義録が発刊された。なお、すでに一九〇一年には日本語の講義録を購読した中国人校外生数名が卒業を果たしている。これは正規の中国人卒業生が誕生する前年のことである。



漢訳
『早稲田大学政法理財科講義』
(1907年2月)

校外生たちの声

『新天地』や『女学の友』など副読本の投書欄には、全国各地、植民地にまで広がる校外生たちから、毎号、多くの投書が寄せられた。本業に勤しむかたわら、睡眠時間を削っての独学に、あるものは将来への希望をつなぎ、あるものはささやかな自由を体感していた。校外生たちの声にしばし耳を傾けてみたい。

講義録内容見本を申し込む書簡（一九五三年二月頃）

朝鮮戦争休戦後まもない朝鮮半島（慶尚南道金海郡）から送られたもの。



京城（現在のソウル）での校外生大会
（1938年）

独学者!! 嗚呼何という雄々しい、たのもしい言葉でしょう。夢からさめた、私は過ぎし年の十月第二十九日法となり中講を拝受する様になりました。

毎月来る講義を日々、かみ砕いて行く程心地のよい事はありません、私はこれが何よりも慰みです、ひねもす野に出て働き夕にかえりて机に向うて中講(中学講義録)を読むとき程嬉しい事はありません、私は独学者として奮闘努力の一生を送らんと思っています。満天下の諸兄、「独学者」の三字を常に念頭におき、離さないで下さい。

高知県・男性(『新天地』一九二四年五月号)

新入生の心

初めて受けとった

早稲田の

講義録

包紙を破って

柔らかく

握りしめたら

甘いインクが

ブンと鼻に来た

嬉しい、うれしい

—今夜から

初めよう—

こう想って

思わず

心臓を押えつけた

長崎県・男性（『新天地』一九三七年七月号）

新天地を送る

〔前略〕私は元氣一杯家事を致して居ります。家事の暇に昨年五月より早稲田講義録で独学を始めました。取らないうちはむづかしいと思つて居りましたが、自分が手にして見ますと実によくわかります。これでは六年卒業の人でも出来そうです。やり始めると面白く時の立つのも忘れ母に注意されます。先生に教わつた英語も少しづつわかります。此の御本は毎月出版部から送つて下さいます。これは私にとりましてなくてはならぬ友です。眠くつた時、あきて来た時、これを読むと元氣づきます。我一人眠いのではない、どの人々も眠いのをこらえ努力しているのだと。これから毎月お送り致します。読者文芸欄に作文や短歌を出して楽しんで居ります。

神奈川県・女性（『新天地』一九三七年七月号）

靴音

火の見やぐらに冬が来たので、

また夜中になると、

靴音がコツコツと寢床に響く。

ぼくは十二時頃まで勉強する。

独学は苦しいが、

また愉しい。

数学と取つくみながら、

僕は火の見やぐらにいる人と思う

黒い屋根々々を見渡しながら、

凍った夜気と闘っている人と思う

すると僕は夢中になって、

難問題に体当りをするのだ。

冬が来たので、

火の見やぐらの上から、

また夜ごと、

靴音が僕を励ましてくれる。

4. 教育民主化の精神のつとに則り——通信講義録の時代の終わり

一九三〇年代に入ると講義録や副読本も次第に戦時色を帯びていった。強まる戦時体制のもと、印刷用紙にも配給制がしかれ、講義録はページ数や部数の制限を余儀なくされた。一九四五（昭和二〇）年三月の東京大空襲では出版部の全ての印刷物を受注していた印刷所を失い、講義録は発行不能の状態におちいった。

敗戦後、通信講義録は教育民主化の精神を体现する媒体として再び脚光を浴びる。アメリカ式の通信教育制度の導入を促すGHQの方針を追い風に、早稲田大学も新制度に対応した講義録の刊行に乗り出し、通信教育部の新設も計画された。しかし、新たにはじまった都道府県の通信教育事業との競合にさらされるなど、部数減に悩まされた早稲田の講義録にかつての勢いはなかった。勤労学生の受け皿として、一九四九年に誕生した夜間開講の第二学部と通信講義録との二者択一を迫られた大学は、最終的に前者を選択する。一九五六年、早稲田の通信講義録は購読者の募集を停止し、七〇年におよぶ歴史に幕を下ろした。それは同時に、門狭きがゆえに行く手が輝いてみえた独学自修の時代の終幕でもあった。

【主な展示資料】

戦時と戦後

田中穂積「時局と独学」（一九四〇年三月）／早稲田大学図書館所蔵

『早稲田大学文学講義』臨時増刊号に掲載。かつての校外生・田中穂積総長は、「東亜新秩序建設の偉業」を担い

る「偉大なる国民」となるためにも、講義録の読者となって修養につとめるよう呼びかけている。

島田孝一「年頭の辞」(一九四七年一月一日)／早稲田大学図書館所蔵

『早稲田高等女学講義』第5号に掲載。一九四六(昭和二一)年に総長となった島田孝一は、早稲田の通信講義録事業を「学問の民衆化」の実践だとし、「新しき日本の民主々義化なる大使命」を担う若者たちが積極的に活用するよう促している。

『早稲田高等学校講義』(一九四九年)／早稲田大学図書館所蔵

戦後の新制高校の誕生に対応して刊行された。教材だけでなく、学習法を解説するガイドブックも作成するなど、新たな工夫が試みられている。

ガイドブック送付願い(一九五三年一月二九日)

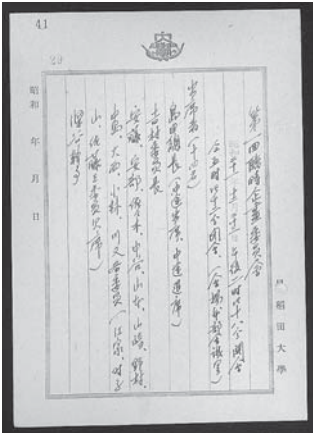
高等学校講義を購読していた海外航路の船員が、寄港先のランゲーン(現ミャンマーのヤンゴン)から出版部に宛てた書簡。

通信講義録から第二学部へ

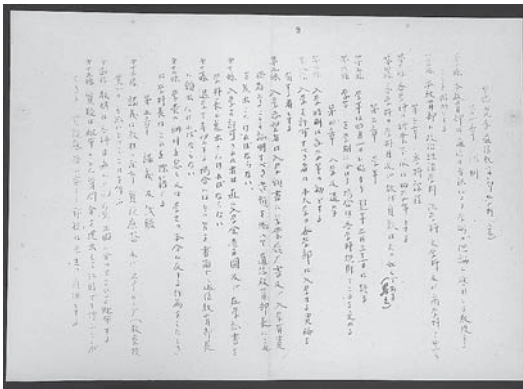
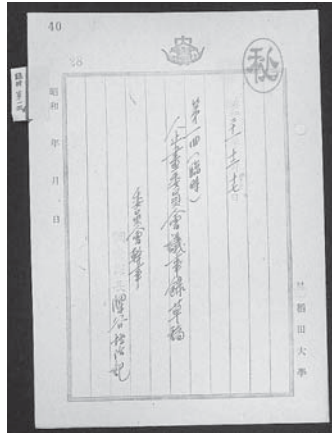
企画委員会議事録草稿(一九四六年二月一七日)

新時代への大学の対応が話し合われた企画委員会でも、通信講義録事業の処遇は主要な検討課題だった。アメリカ式の通信教育の導入を促すGHQの方針が伝えられるなか、自身も校外生出身者であった吉村正委員長は、この時点で早くも講義録の存続に難色を示している。

「早稲田大学通信教育部学則(案)」(一九四七年)



企画委員会議事録草稿 (1946年12月17日)



早稲田大学通信教育部学則 (案) (1947年)

「教第八七号 出版部講義録卒業生取扱いに関する件」(一九四八年二月二三日)
 新制度に対応した講義録卒業生の編入手続きについての申し合わせ。
 第二学部設置委員長協議会議事録(一九四八年六月一七日)